

侍は通常、長い刀と短い刀の 2 本の刀を持っていた。短い刀は脇差と呼ばれ、「脇に挿入している」ことを意味する。

仙台藩の第 2 代藩主である伊達忠宗（1600–1658）は彼の父である政宗（1597–1636）の 20 回忌に、追悼の意を表して儀式用の重い脇差を作らせた。もともとは仙台にある、伊達家の御廟である瑞鳳殿に納められていたが、明治時代（1868–1912）に家族のもとに戻された。第二次世界大戦後、家族はその刀を瑞巖寺に寄贈した。刀は宮城県指定文化財である。